０８／１０／１９　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：救いは信仰のみによる４
聖書箇所：ローマ人への手紙　３章２７－３１節

「救いは信仰によって与えられる」とパウロは繰り返し私たちに教えてくれています。３章の２１節から私たちがしっかり理解しなければならない神のすばらしい真理がたくさん記されていました。恐らく、皆さんもそのことに気付かれたことでしょう。パウロはこの２１－２６節を通して私たちに、救いについて、神の恵みについて、神が為してくださった「なだめ」について、「義」について、神ご自身が義であり信じる一人ひとりを「義」としてくださること、そのことを私たちに教え続けてくれています。私たちはこのみことばを通して、救いは行ないではなく、信仰によってのみ与えられるというパウロの教えを学んで来ました。パウロが言いたかったことは、どんなにすばらしい祝福を神は備えてくださったか、どんなにすばらしい祝福をイエス・キリストを信じる私たちに与えてくださったかという、そのことです。しかも彼は、この一つ一つを見るときに、どれを見ても私たち罪人が受けるに相応しいものは一つもない、すべて神の一方的な恵みである、あわれみであるということを繰り返し教えているのです。そのように教えたパウロはいくつかの疑問を想定することができました。というのは、この教えを聞いていた人々の中にある疑問が起こり得ることをパウロは知ったからです。ですから、その質問を記した上で、それに対して答えを与えるのです。それを通して彼は救いのすばらしさを人々に、そして、私たちにも教え続けて行くのです。

今日、私たちが見ようとしている２７節から３１節までに三つの質問が記されています。その質問をごいっしょに見て行きましょう。

☆パウロによって為された三つの質問

１．私たちの誇りは何か？　　２７－２８節

一つ目の質問は２７節を見てください。**「それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。…」**と、これが最初の質問です。なぜ、このような質問をしているのでしょう？皆さんもよくご存じのようにユダヤ人たちは自分たちのことを誇っていました。２：１７にこのように記されていました。**「もし、あなたが自分をユダヤ人ととなえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、」**と。彼らは自分たちは確実に救われていると信じ切っていたのです。なぜなら、自分たちには神から律法が与えられている、自分たちは神によって特別に選ばれた民であるとしていたからです。また、自分たちは神が命じたことをこのように行なって来ている、異邦人のように罪を犯していないと言います。それゆえに、彼らは異邦人たちを見下し、彼らをさばいていました。そのことが２章に記されていました。３：９でパウロはすべての人がいかに罪深い存在であるかを明らかにすることによって、神だけが誇りであり自慢するに価するお方であることを教えました。そして彼は、神だけを誇り自慢する者となることを願いました。これは、もうすでに私たちが見て来たとおりです。

そして、この２７節から、パウロは再びこの救いに関して**「私たちの誇りは……それはすでに取り除かれました。」**と、このように言います。救いに関しての**「私たちの誇りは……すでに取り除かれました。」**、「完全に除外された」と言うのです。家に近寄れないように外に閉め出す、そういう意味をもったことばを使っています。つまり、今まで特にこのユダヤ人たちが誇りとして来たことに関して、パウロはもうそのようなものはあなたから完全に除外された、あなたから取り除かれた、つまり、そういうものを誇るのではなく、誇らなければならないものを誇る者へと、私たち信仰者は変えられたということを教えようとするのです。２７節**「…それはすでに取り除かれました。どういう原理によってでしょうか。行ないの原理によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。」**、どのような種類の**「原理」**によってでしょう？確かに、ここで使われていることばは別のところでは「律法」と訳されていることばですが、この「律法」ということばは場所によって様々な訳がなされているので、実際にこのローマ書でも７章、８章でも同じことばをここで使われているように**「原理」**と訳しています。つまり、彼が言いたかったことは、「どのようなことによって私たちは救われるのか？」ということです。もう皆さんもよくお分かりのように、かつて私たちは見て来ました。ユダヤ人たちは行ないによって救われると信じていたのです。律法を厳守することによって救いを得ると彼らは信じていました。そしてパウロは、それがことごとく誤りであることを説いてきました。そこでもう一度彼らに対して、私たちは救いについて、行ないによって得たのか、それとも、信仰によって得たのか、どちらなのかと問うのです。当然、答えは分かっています。信仰によって私たちはすばらしい救い、罪の赦しを得たのだ、だから、救いに関して、クリスチャンは自分を誇ることも誉めることもしない、それは相応しくないことだとパウロは言うのです。な

ぜなら、救いは何から何まで神のみわざだからです。もし、私たちの努力や功績によって救いを得るとするなら、私たちは自分自身を誇ることができます。ユダヤ人たちのように、週に何度も断食をしているからとか、自分が得たものの十分の一をささげているからとか、こういうことをしているから私は救われているにちがいないと、彼らは行ないを誇る者です。皆さんはよくご存じです。ルカの福音書１８章に、宮に上った一人のパリサイ人の話が記されていますが、彼はこのようなことを言いました。**「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』**、だから、私は神に喜ばれ神によって救いの恵みに与ることができるのだと。

ユダヤ人たちは明らかにそのような行ないが救いをもたらすと信じていたのです。彼らの救いの根拠は「行ない」でした。イエスご自身はそのことを否定されました。今の時代の私たちについても、私たちのいかなる善行も宗教的な熱心さも、慈善行為もいかなる行ないも、私たちに罪の赦し、救いをもたらすことは絶対にないのです。これは私たちにとっては復習になりますが、思い出してください。私たちの罪のために「なだめの供え物」を送ってくださったのはいったいだれだったのか？それは神です。神の怒りを鎮めるために、神ご自身が「なだめの供え物」を送ってくださった、なぜなら、私たちで「なだめ」をもたらすことができないからです。さばかれるべき罪人をあわれんでくださったのはだれでしょう？神です。さばかれるべき罪人に罪の赦し、救いの御手を差し伸べてくださったのは神です。かたくなで悔い改めのない心に働き、罪人であることを示し、そのことを悟らしてくださったのは神です。そのかたくなな罪人が罪を悔い改めて主イエスを信じるように決心できたのはだれのおかげだったのでしょう？神です。神の働きです。ですから、パウロは言います、救いは１００％神のみわざだ、だから私たちの誇りは完全に除外された、私たち自身がこの救いに関して誇るものは何もない、私たちが本当に誇るべきは神だけなのだと、そのことをパウロは言わんとしているのです。エペソ２：９でパウロは**「行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。」**と言いました。救いに関して、私たちは何一つ神の前に誇ることはないのです。何も誇れないのです。なぜなら、救いは行ないによって得るものではないからです。１００％神の恵みだからです。Ｉコリント１：２６－３１を見ましょう。**「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。:27 しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。」**、この世の愚かな者、この世の弱い者、取るに足りない者、見下されている者、無に等しい者とは私たちのことです。もしこれを見て、これは私のことではないと思うなら問題があります。パウロは私たちはそのような存在だと言います。私たちはこのような者なのです。このような者に対して神は何を為さったのでしょう？このような私たちを神が選んでくださった、このような私たちを救ってくださったのです。だから、２９－３１節にはこのように続いています。**「:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。:30 しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになられました。:31 まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。」**、私が偉いから神が救ってくれたのですか？違います。私たちはどうしようもない、取るに足りない、救われる資格のまったくないそのような存在だった、こんな者を救ってくださったのが神であり、ゆえに、私たちは私たちでなく神を誇る者になるべきだとパウロは言うのです。

旧約聖書の中にもそのようなことが記されています。エレミヤ９：２４**「誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。――主の御告げ。――」**、主がエレミヤにこのように言われたのです。救いに与った一人ひとりが誇るものは私たちが救われていることです。私たちが罪赦されてこの神のすばらしい救いをいただいたこと、そして、その救いを私たちにもたらしてくださったこの偉大な神が私たちの誇りであると、そのようにみことばは私たちに教えてくれるのです。新約聖書もそして旧約聖書も。

ローマ書に戻って、２８節のみことばを見てください。非常に大切なみことばです。多くの人たちに確信をもたらしたみことばでもあります。**「人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」**、もうすでに見て来たように、神が罪人に対して義なる者、聖い者と宣言してくださるのです。これは私たちが罪を犯さない完全な聖い者とされたということではありません。私たちは悲しいことに、地上にあってまだ罪を犯す者です。しかし、神はイエス・キリストを信じる者たちに、その人たちを聖いと宣言してくださり、その罪を赦してくださり、そして、この聖い正しい神と交わることを赦してくださったのです。

それはどのようにして与えられるのでしょう？２８節に**「律法の行ないによるのではなく、信仰による」**とあります。あの有名な宗教改革を行ったマルチン・ルターは、この２８節の**「信仰による」**ということ

ばを「信仰のみによる」と「のみ」という語を加えました。それについて当時のカトリック教会は彼を非難しました。「ルターはみことばから逸脱した」、「聖書の教えから外れた」と。というのは、この「のみ」という語は確かに原語にはないのです。しかし、ルターはあえてここに「信仰のみによる」と「のみ」という語を彼自身が行なった訳の中で加えたのです。なぜ、彼はそのようなことをしたのでしょう？それは、それがパウロが言いたかったこと、教えたかったことだとルターはよく知っていたからです。トーマス・アクイナスも同じように「信仰のみ」としています。この２８節で**「人が義と認められるのは、」**とありますが、これは簡単に言えば「人が救われるというのは律法の行ないではない。」ということです。**「律法の行ない」**、神が与えられた律法、特にこのモーセの律法を指しているのですが、律法によって救いを得ようとするなら、この律法を１００％守り続けなければいけません。しかし、それを完璧に行なうこと、それに完璧に従い続けることは不可能です。だから、繰り返しますが、私たちは自分で自分を救うことができないのだと、パウロはここでそのことを言っているのです。**「律法の行ないによるのではなく」**と、あなたがどんなに頑張ってもあなたの行ないによってはあなたの救いはないのです。では、どうすれば私たち罪人は救われるのでしょう？それは神が備えてくれた方法によるのです。どのような方法でしょうか？**「信仰による」**と言います。選択肢がたくさんあるのなら「のみ」などと言えません。人間ができるあらゆることをもってしても、救いを得ることはないのです。救いを得る方法はただ一つしかありません。それは神が備えてくださった「信仰による救い」という方法だけなのです。パウロはそのことをここで言いたかったので、それを知ったルターは、だから「信仰のみによる」としたのです。彼の訳が間違っていたのではありません。その通りなのです。これがこのみことばが私たちに教えていることです。

ですから、私たち信仰者の誇りは確かにこのイエス・キリストだけです。この神だけが私たちの誇りです。私たちは自分も自分の行ないも何も誇れません。また、誇りません。まして、私たちの信仰も実は誇らないのです。今、あえてこう言ったことに驚かれた方がいるかもしれません。というのは、私たちは信仰によって救われたのだから信仰を誇ってもいいのではないかと思われるかもしれないからです。でも、みことばをもう一度見ると２８節には**「信仰による」**とあり、２７節にも**「信仰の原理によって」**と記されています。つまり、みことばが教えることは「信仰というその媒体を通して私たちは救いに至る」ということです。パウロが言いたいことはどんな行ないをもっても私たちは救われないということです。ある人はバプテスマを受けること、洗礼を受けることで救われると思っています。それは間違いです。救われません。では、聖餐式に与ることによって救われるのでしょうか？救われません。教会に属することによって救われる？救われません。どのような行ないもあなたを救うことはありません。では、あなたが今日から正しい行ないを継続して行くなら救われますか？救われません。あなたを救ってくれるのは神だけです。だから、私たちの誇りはすべて神に行くのです。なぜなら、最初に話したように、神の働きは私たちのうちに為されて私たちの本当の姿を見せてくれます。私たちがどれほど醜い汚れた罪深い者であるかということを神は示してくれるのです。これでもかと思うほど神は私たちに私たちの本当の姿を示されるのです。そして、私たちはそのとき「神さま、私はさばかれて当然です」ということに気付くのです。そして、私たちはそこに備えられたすばらしいキリストの救いを見て神のあわれみを求めるのです、「神さま、どうぞ私を救ってください。」と。そして、私たちはイエス・キリストを信じてこの救いをいただこうとするのです。

この過程において、どの部分が私たちの力でできたでしょう？考えてみてください。罪に気付くことを私たち自身でできたかどうかです。私たちが自分にはイエスが必要である、救いが必要であると気付いたのは自分の努力だったのでしょうか？イエスを信じますと決心したのは私たちの努力だったのでしょうか？確かに、私たちはみことばを聞きイエスを信じますと決心しました。でも、聖書を見たときに、聖書が教えてくれるのは、その過程においてなされたすべての行為は神が為してくださったということです。なぜでしょう？霊的に死んでいる者が霊的なことを理解することは無理だからです。肉体的に死んでいる者がからだを動かすことが無理なように、霊的に死んだ者は神のことを理解できないのです。理解できるように働いてくださったのは神であり、「私はイエスさまを信じます」とそのような決心に至らせてくださったのも神なのです。だから、神だけが誉め称えられるのです。だれかが私に伝道してくれた、それは神がそのように人を使われたのです。この人が伝道すると人は救われる、とんでもありません。人は人を救うことはできないのです。神がお救いになるのです。私たちの責任はこの神の救いを人々に正しく伝えることです。救いは１００％神のわざだと言い切れるのはどうしてでしょう？今、見て来たように、すべてのことが神のみわざだからです。ですから、「私はイエスさまを信じます」というこの信仰に関しても、実は、神が私がそのような決心ができるように働いてくださったから、私は信じることができたのです。この「信じる」という行為、信仰という行為も神からの賜物なのです。

ですから、先ほどから見て来たように、バプテスマが人を救わないように、この信仰という行為も私

たちを救うのではありません。神があわれみをもって私たちを救ってくれたのです。だから、私たちが誇りとするのは神しかいないと言うのです。イギリスのウェストミンスターチャペルの牧師であったロイド・ジョーンズ博士はこのように言っています。「自分の信仰を誇ってはならない。信仰そのものが私たちを救うのではない。信仰とは単に、私たちを救うキリストの義を私たちにつなぐ通り道であり、器であり、結び目でしかない。主の義こそ救う義であり、信仰は単にそれを私たちにもたらすのである。主の義こそ、信仰によって信仰を通して私たちを救うのである。」と。ですから、私たちクリスチャンが誇るのは私たちの信仰ではなく、私たちにそのような信仰を与えて、そして、イエスを信じるように導いてくださり、救ってくださる唯一真の神だけなのです。その方を誇るのです。

パウロはガラテヤ人への手紙６：１４でこのように言っています。**「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」**、パウロは私たちの誇りがどこにあるのかよく分かっています。彼が言いたいことは「私の誇りは一つしかない、このイエス・キリストだ、私のためにあの十字架でいのちを捨ててくださったイエス・キリストだ、真の神であるこのお方だけだ、この神が私を選び、救い主を与え、救い主を身代わりに殺し、そして、その救い主を信じてこの救いを得るように働いてくださった、すべて神のみわざゆえに私は神だけを誇る」です。恐らく、この真理をパウロは正しく理解していたのでしょう。アイザック・ワットという一人の牧師がいました。何百もの讃美歌の歌詞を書いた人です。世界で最も愛されている讃美歌の一つ、皆さんもよくご存じの１４２番「栄えの主イエスの…」。日本語の歌詞はこうです。「栄えの主イエスの十字架を仰げば、世の富、誉れは塵にぞ等しき」、これが１番の歌詞です。アイザック・ワット自身が書いたその詩はもう少しあります。直訳するとこのような歌詞になります。「栄光の君が死なれたあの驚きの十字架を見上げるとき、私の最も価値ある宝も塵と思え、私の自慢とするすべてのものを私は蔑む。」と。彼はこの神のすばらしい救いのみわざを覚えるときに、私にとって価値があるもの、私が大切だと思っていたものは、あのパウロが言ったようにまったく塵に過ぎない、私はそのようなものを蔑むと言います。なぜなら、それは価値のないものだから、そのようなものを誇って来た自分が悲しい、私にはもっとすばらしいものがあり、誇るものがある、この主イエスだけを私は誇る、この方にだけその価値があると言うのです。

どうですか？信仰者の皆さん。あなたの誇りはパウロが言ったようにイエス・キリストだけでしょうか？クリスチャンである皆さんはこのイエス・キリストを心からこのように誇っておられますか？私は世の中のどんなものよりもあなただけを誇ります、私にとって最も価値あるもの、最も大切なものはあなたですと。なぜなら、私たちがどんなに大切にしているものであっても、どんなに高価なものであっても、それは私たちに救いをもたらさないからです。

私たちに罪の赦しを与え、私たちに永遠を約束してくれたのはこの神しかいない。その方をパウロは誇ったのです。その方だけを誇ったのです。そして、恐らくアイザック・ワットも多くの信仰者たちは同じように「私の誇りはただあなただけです」とそのように思って生きたのです。このようなことを口で言うのは簡単です、「私の誇りはあなたです」と。でも、問題は私たちが本当にそのように生きているかどうかです。どう思いますか？キリストを誇りとした人の生き方はどのような生き方なのでしょう？どのように生きることなのでしょう？少なくとも、私たちが言えることは「この神の栄光のためだけに生きる」です。時間を無駄にすることなく、この神のすばらしさを人々に証しようとする生き方です。この神に喜んでいただきたい、その思いがその人のその生き方のすべての動機となってその人を駆り立てているのです。ただ、何となく日を過ごしていないでしょうか？この神がくださった今日という日、何とか神の助けをいただきながら、神の証のために、神のすばらしさを人々に明らかにするために生きて行きたい。私が望むことはただ一つだけ、私に救いをくださったこのすばらしい偉大な神が喜んでくださるように今日を生きること、そのような人がキリストを誇りとして生きている人です。このすばらしい救いを誇りとして生きている人です。そのような信仰者が確かに存在したし、パウロもそのような人物だったのです。この救いのすばらしさを知っていた人物でした。

２．神はすべての人の神なのか？　　２９－３０節

二つ目の質問に進みましょう。２９－３０節**「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人にとっても、神です。:30 神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によって義と認めてくださるとともに、割礼のない者をも、信仰によって義と認めてくださるのです。」**、神はすべての人の神なのでしょうか？と言っています。ユダヤ人たちは神はひとりだということを確信していました。皆さんもよくご存じのように、申命記６章４節にはそのように記されています。**「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」**と。彼らはそのことを確信していました。ところが、彼らの問題は「この神は私たちだけの神だ」としていたことです。神に逆らっている異邦人たち、神でない者を崇拝している異教徒たち、神がそのような人たちを自分たちと同じように造

り、愛しているとはどうしても思えないと言うのです。というのは、紀元１００年代に活躍したユダヤ教の教師、シメオン・ベン・ヨハイという人物はこのようなことを教えています。「聖なるお方､祝福されるお方がイスラエルに次のように言われた。『わたしはこの世界のすべての被造物を支配する神である。しかし、わたしはわたしの名をただあなたとだけに結びつけた。それは、わたしは偶像崇拝者の神としてではなく､イスラエルの神と呼ばれるから。』」と。ユダヤ人たちのプライドが見えます。彼らはこの唯一真の神は私たちだけの神だと、どうしてもその考えから逃れることができなかったのです。

そこでパウロは教えます。本当にそうなのか？と…。Ｉコリント８：４ｂ－６には、今、私たちが見ていることが同じようにパウロによって記されています。**「また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。:5 なるほど、多くの神や、多くの主があるので、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、:6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」**、確かに、世の中を見ると神と呼ばれるものはたくさんあります（確かに、このコリントの町も偶像に溢れた町でした。あのアテネも、そして、私たちのこの国もそうです)。しかし、本当の神はただひとりなのだとパウロはそのことをここで主張するのです。だから彼は「神がひとりならどういうことになるか？その方はユダヤ人の神でもあるしユダヤ人でない異邦人の神でもあるのではないか」と言うのです。ひとりの神がすべてのものをお造りになったとするなら、この方はユダヤ人の神でもあり異邦人の神でもあると。旧約聖書のイザヤ書でもイザヤはそのことをこのように教えています。イザヤ４５：５**「わたしが主である。ほかにはいない。わたしのほかに神はいない。あなたはわたしを知らないが、わたしはあなたに力を帯びさせる。」**、同じ４５：２１－２５にも**「告げよ。証拠を出せ。共に相談せよ。だれが、これを昔から聞かせ、以前からこれを告げたのか。わたし、主ではなかったか。わたしのほかに神はいない。正義の神、救い主、わたしをおいてほかにはいない。:22 地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。:23 わたしは自分にかけて誓った。わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。すべてのひざはわたしに向かってかがみ、すべての舌は誓い、:24 わたしについて、『ただ、主にだけ、正義と力がある。』と言う。主に向かっていきりたつ者はみな、主のもとに来て恥じ入る。:25 イスラエルの子孫はみな、主によって義とされ、誇る。」**、唯一真の神はすべてのものをお造りになっただけでない、この救いの御手をすべての人に向けておられるのです。だから、パウロはこのローマ書３章でこのように言います。「神が唯一なら、この神がユダヤ人にとっても異邦人にとっても神であるなら、その方が私たち人類のために備えてくれた救いというのは、ただひとつであるはずだ」と。３０節には**「神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によって義と認めてくださるとともに、割礼のない者をも、信仰によって義と認めてくださるのです。」**とあり、どちらの者も信仰によって義と認められる、信仰によって救ってくれる、神が唯一ならすべての人が救われる、そうではありませんか？とパウロは言うのです。

だから、使徒の働き４：１２で**「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」**とある通り、唯一真の神が存在し、その神が神に逆らっている私たち罪人のために救い主を送ってくださった、その救い主はユダヤ人のためであり、また、私たち異邦人のためでもある、神が備えられた救いは唯一であると言うのです。驚くべきことは、今私たちはユダヤ人も異邦人もキリストによって一つにされるという奇蹟を見ているのです。人種が何であろうと国籍がどこであろうと、私たちはキリストによって一つにされるのです。まさに、私たち人間のために備えられた救い主は、ただひとりしかいないのです。この方によってすべての人が救いに与るからです。

３．信仰は律法を無効にしたのか？

「私たちの誇りは何か？」、「この神はすべての人の神なのか？」そして、三つ目は３１節にあるように「信仰は律法を無効にしたのか？」と言います。３１節**「それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、律法を確立することになるのです。」**、なぜ、パウロはこのような質問をしたのでしょう？パウロはこれまでに律法を守ることによってはだれも救われないということを言って来ました。そうすると、ある人々には「律法は必要ではない、律法は不必要ではないか」と考える人々が当然出て来ます。だから、パウロは**「絶対にそんなことはありません。」**と非常に強い否定を行なっています。ある人たちは「律法によって救われないのならこの律法はまったく無意味であって、私たちが救われた後、私たちは救われたことを喜びながら感謝しながら自分の好きに生きていけばいい。」とそのように考えたのです。無律法主義者という人々です。彼らが考えることは、救われたのだから、罪が赦されたのだから、「では、私はこの地上にあって好きなように生きて楽しんでいけばいい。なぜなら、神は罪を赦してくださったから。」ということです。パウロはそのような人たちが存在していることを知っています。ですから、このローマ書６章で、それがいかに間違っていること

なのかを教えます。そのことは、その時に学ぶこととして、この３章３１節でパウロは、「律法は信仰を無効にしたのではなく、かえって、律法を確立するのだ。」と言っています。

「確立する」とは「有効にする、しっかりさせる」という意味です。イエスがこの世に来られたときに、このような話をされました。マタイ５：１７にこのように記されています。**「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。」**、イエスは律法を成就するために来たと言われます。つまり、律法には限界があるのです。でも、この信仰はそれを可能にしてくれるのです。多分、パウロがここでこのようなことを言わんとしていたのではないかと思われる二つのことを見ましょう。

１）律法によって神が望まれる生き方がどのようなものかを知ることができる

私たちは律法を見たとき、私たちがどのように生きることが神に喜ばれるのかを知ります。では、私たちが強い意志をもってそのようなことを守れるのでしょうか？もうご存じのようにそれは無理です。ところが、それが可能になると言うのです。このローマ人への手紙８章を見ると、パウロはそのことについてこのように言っています。８：３－４**「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。:4 それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。」**、肉に従って歩んで行くなら律法を守ることはできないけれど、**「御霊に従って歩む」**なら可能だと言っているのです。どういうことでしょう？今、私たちが見て来たように、律法は私たちにこのように生きて神を喜ばせるようにということを示してくれました。私たちが救われたとき、私たちが生まれ変わったときに、私たちのうちには「聖霊なる神」が与えられました。その「聖霊なる神」が私たちをキリストに似た者に変えようとしているのです。聖霊なる神をいただいた私たちは、神が喜んでくださる生き方を、聖霊の助けによって為して行くことできる者へと変えられているのです。ですから、私たちが救われることによって、律法ではできなかったことを神が可能にしてくださったのです。**「律法を確立した」**と言うのです。これは律法の役割です。

２）律法は私たちに救いが必要であることを悟らせた

もう一つ、私たちが考えられること、それは「律法が与えられた目的」です。何のために与えられたのでしょう？先ほど見たように、私たちがどのように生きるかを示すだけではないのです。律法が与えられた目的は、私たちに救いをもたらすためではなくて、救いが必要であることを私たちに悟らせるためです。「私たちに救いが必要である」ということを悟らせるためにこの律法が与えられているのです。ローマ３：２０には**「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」**とあります。律法は私たちにこのように問い掛けます。「あなたはわたしの戒めを守りましたか？守っていますか？」と、それに対して私たちができる答えは「いいえ、できません」です。そのとき、私たちはあることに気付かされるのです。それは私たちはこの神のさばきに服する運命にあるということです。なぜなら、神が望んでおられることを私たちが守っていなければ、当然、神からのさばきがあることは明らかだからです。戒めを破っている私たちに約束されていることはさばきでしかないということに気付くのです。

先ほど見たガラテヤ人への手紙３：１０に**「というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**とある通りです。律法の書に記されていることを**「堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**というのです。残念ながら、私たちはだれひとりとしてこの律法を守っていないのです。だから、私たちは神の**「のろいのもとにある」**、神のさばきを受ける運命にあるというのです。そのことに気付いた私たち罪人はどうしますか？そのさばきから逃れるためにいろいろなことを試みてみますが、どれも無理なのです。神の戒めを守ろうとするけれど無理なのです。そして、自分のその弱さ、自分の罪深さに気付いた私たちはどうするのか？神の前にただあわれみを求めるのです。「神さま、どうぞこの罪人の私をあわれんでください」と。そして、私たちは神からのすばらしい知らせを聞くのです。神が備えてくださったこのイエス・キリストによって私たちのすべての罪が赦されるという知らせです。私たちが生まれ変わるという知らせです。私たちはそのメッセージを聞くとき、喜んでそれを受け入れようとするのです。ですから、律法は私たちに救いが必要であるということを悟らせてくれるのです。

しかし、律法は私たちに救いが必要であることを悟らせることはできても、救いをもたらすことはできませんでした。神がその救いを備えてくれたのです。ガラテヤ３：２４には**「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」**とあります。**「養育係」**ということばは聖書の下の引照欄に「家庭教師」と書いてあります。これは少し意味が違います。というのは、この当時、**「養育係」**と言われる人たちが存在していました。ローマ、また、

ギリシャの人々は奴隷を自分の家庭に雇うのですが、ある奴隷は両親に代わってその子どもを監督、訓練するという役割のために雇われました。それがその奴隷の仕事だったのです。詳しく言うと、この奴隷はその子どもが学校に行き帰りすることをしっかりと監督し、子どもがしっかり勉強することを監督し、しつけにおいても訓練などを行ないました。でも、この**「養育係」**は無期限に養育係ではなかった、ある時点でその務めが終わるのです。子どもが成人したとき、その時までです。でも、その時まで**「養育係」**はその子どもを教え導いて行くのです。パウロはここでこのことばを使いながら、律法の働きを明らかにしたのです。律法の働きは、人々の目を救い主の方に向けるという役割です。でも、そこから解放されるときが来るのです。つまり、子どもが成人したときに養育係から解放されるように、その人が救いに与った時に律法から解放されるのです。

律法は私たちに救いをもたらさなかった。しかし、キリストを信じる信仰によって私たちは神の救いをいただくのです。律法にできないことを主は為してくださったのです。律法は私たちに救い主が必要であることを示し、救い主はその律法ができなかった救いを私たちに与えてくれたのです。だから、パウロはこのようなわけでこの律法はないがしろにできるものではない、大切なものだと教えるのです。しかし、律法にできないことを主が確立してくれた、そこで彼は言います。「私たちが誇りとするものは何か？私たちが心から誇るものは何か？それはこの主以外の何ものでもない」と。「私たちにこのようなすばらしい救いをくださり、そして、救われた私たちをこの方はしっかり守って、永遠のいのちへと導いてくださる」と。皆さん、私たちは大変な祝福をいただいているのです！偉大な神が私たちの神となったのです！こんなに嬉しいことは他にありますか？このすべてをお造りになった唯一真の神が私の神であり、その方が私を日々導き、そして、永遠の天にまで導いてくださる、この神と永遠をともに過ごせる、このようなすばらしい祝福をくださったのです。だから、パウロは言うのです。「私が誇るのはただひとつだけ、この神だけだ」と。

あなたはこのように歩んでおられますか？神がくださった唯一の救い、この救いによって私たちは生まれ変わることができるのです。そして、生まれ変わった一人ひとりは、この生まれ変わらせてくださった神、このすばらしい祝福をくださった神を誇りながら、与えられた今日を生きるのです。信仰者の皆さん、そのように生きてください！！私たちはこの主を誇りながら、この主のすばらしいメッセージを語りながら、この方に従い続けて行くことです。それがこの地上に置かれている私たちの務めです。キリストを誇りとして、そして、このメッセージを語る者として、どうぞ歩み続けてください！地上の旅は間もなく終わります。永遠から見るなら、地上の８０年、９０年、１００年はあっという間です。その後、私たちには永遠があります。その永遠を神とともに祝福のうちに歩むためには、私たちはしっかりと今日を正しく歩むことが必要です。

イエスを信じておられない方、今、悔い改めて主に立ち返ることです。

信じている皆さん、誇りとするべきものを誇りとしながら歩み続けてください。確かに、この方は私たちが誇るに価する方です。そう思いませんか！！